

中国女文字の最終局面

—伝承者陽煥宜の死—



銅山嶺農場にて

2004年9月7日撮影

Timothy O' Rourke

遠藤 織枝

1. はじめに

1993年、遠藤が中国女文字—現地では「女書」—の現地を訪ねて、調査と研究を開始したとき、陽煥宜は唯一の伝承者であった。案内してくれた趙麗明⁽¹⁾が書ける人が4、5人はいると言うので、それらの人を実際に訪ねて書いてもらってみると、ほとんど書けない人ばかりだった。

そのころは、この文字を娘時代に使い、多くの作品を残した高銀仙・義年華の2人の伝承者が没して間もない時期であった。高は1990年、義は1991年にこの世を去っていた。

この2人は、80年代にこの文字が世に知られて、研究者たちが通うようになったとき、この文字の事情をよく知る最後の伝承者として、調査研究に協力・貢献した。遠藤が現地入りしたときは、1990年から文字を再開した陽煥宜1人が伝承者であった。

高・義の2人の没後2、3年しか経っていないときで、まだ知られていない新たな伝承者がいるのではないかというのが、最初の印象であった。

1994年に2度目に現地へ行ったときは、女文字に関する情報を集め、新た

な伝承者を探すことを第1の目的とした。

その年、幸いなことに、何艶新という、少女時代に祖母から習得した、少し文字の書ける女性に出会うことができた。出会った当時は拙い文字を長い時間かかって書くことしかできず、40年のブランクが埋められるかどうか不安であった。しかし、95年までに彼女は熱心に練習して少女時代の文字を取り戻した。ただし、1940年生まれの何艶新は漢字の教育を受けていて、この文字を実際に娘同士で使った経験はない。

その後97年までの調査では、この文字が伝播していたとされる村々へ出向いた。延べ150か村で、この文字を「見たことがある・書いたことがある・習ったことがある・書いた人を見たことがある・書いたものを持っている・持っている人を知っている」などなど、文字に関するあらゆる情報を集めるための聞き取り調査を行った。その結果、文字で書いたものの原資料が残っていることはわかったが、新たな伝承者に関する情報は得られなかった。

そうすると、陽煥宜と何艶新以外には伝承できる女性はいないことになり、この2人と共にこの文字は消えるだろうと考え、今までこの文字を紹介するたびにこの文字は消滅寸前の状態だと伝えてきた。

2000年に入って、湖南省江永県政府は観光開発にこの文字を利用することを考え始めた。そして、行政の立場から保存を考えるようになった。そのために、5人の女性に「女書伝承者」という称号を与え、文字を書き、教え、伝えることを奨励するようになった。その中には上記陽煥宜・何艶新は当然含まれるが、それ以外に、最近書き始めた女性にも伝承者のお墨付きを与えた。その1人何静華は積極的に文字を書き、歌を作っているが、その文字の形は、何静華流に装飾されて、本来の文字とは大きく姿を変えてきている。三朝書⁽²⁾に似たものも盛んに作っているが、本来の、女性たちの心をこめて丹念に作ったものとは似ても似つかぬものを乱造している。

このように、保存の名の下に文字は変質を始め、将来が大変憂慮される事態を迎えている。その矢先の今年9月20日に陽煥宜が死去した。このことにより、女文字の衰退と変質に大きな拍車がかかることが予測される。ここで、陽煥宜の死を悼み、今までの彼女へのインタビューを基にして、彼女の生涯

と女文字との関わりについてまとめておきたいと考える。

以下に、1993年8月から2004年9月まで10数回に及ぶ聞き取りをトピックごとにまとめていくが、高齢でもあり、日本語—北京語—現地語の2重通訳の間に誤解が生じていた可能性もあって、同じ質問に対する答えが前回とは異なるという場合も多かった。それらもそのまま、矛盾点として指摘しながら陽煥宜のことばとして、書き連ねていく。

陽煥宜のインタビューから知りえた娘時代のことなど、1990年以前を2.とし、世に知られるようになった90年以降を3.として大きく分けて記す。

なお、年齢については、前回言った年齢から計算したものと合わないことが多い。ここで、彼女の答えた年齢と訪問時期とを併記してすべてを記しておく。

2. 1990年以前の陽煥宜

2.1 娘時代

3、4歳のころから纏足をしていた。農業をするのに困るので、12歳でやめた。とても痛かった。纏足はいやだったが、習慣で仕方がなかった。地主などで農業をしない人は生涯纏足をしていた。

10、11歳のころ、ほぼ同年齢の友人と4人で結交姉妹⁽³⁾を結んだ。4人とも、一緒に遊んだり、昔から伝わる民歌を歌ったり、仕事をしたりする友だちだった。年が同じ人には「老同」と呼び、年が違う人には「姐々」「妹々」と呼び合い、名前で呼ぶことは少なかった。そのころはまだ女文字は習っていなかったので、結交書⁽⁴⁾は書けなかった。

実の姉が一人いたが、その姉とより、「老同」「姐妹」との方がずっと仲がよかった。一緒に布鞋を作ったり、織物をしたり刺繍をしたりした。

この「姐妹」の一人が結婚すると決まったとき、結婚式の1か月前からその「姐妹」の家で一緒に暮らして、刺繍をしたり、三朝書を作ったりした。遠くへ行って離れてしまうと、関係は少なくなるが、近くの人とは結婚後も交流を続けた。

結交姉妹を結ばない人もいた。静かにしていきたい人は結ばなかった。

2.2 女文字の習得

2.2.1 習得の方法

2.2.1.1 義早早の家に通って習う

14歳のころ⁽⁵⁾、結交姉妹の1人、大路西村の陽干干⁽⁶⁾と一緒に、興福村の義早早の家へ通って女文字を習った。興福村まで歩いて通った。4、5里⁽⁷⁾あった。楊家村の友だちと一緒にいった。一緒に習いに行った子で覚えられなかった子もいた。

この義のところへ1週に1度、10日に1度ぐらいの頻度で習いに行った。1年ぐらい習った⁽⁸⁾。

義早早は40歳ぐらいだった。義は刺繍などいろんなことができて、文字だけでなく、刺繍したり、棉を紡いだりすることも教わった。義早早は足が小さかったから⁽⁹⁾あまり働けなかった。義の書く文字は大きくもなく小さくもなく、とてもいい字だった。人から頼まれると書いてあげていて、他の村からも結交姉妹や結婚のとき、書いてもらいに来っていた。書くのを仕事としているようだった。

習うときは1枚書いてもらおうと400文～600文払った。1人だと高いが、2人一緒に400文だから具合がよかった。それに、大勢一緒に習ったのでは効果が少ないが、2人というのはちょうどよかった。

そのお金は自分で働いて稼いだ。そのころ、2、3日働くと1000文もらえた。1日落花生を掘る労賃が300文だった。

先生の手の動きを見ながら自分も書いて覚えた。歌いながら覚えた。たくさん文字があるので時間をかけて少しずつ習った。家に帰ってから練習帳に書いて練習した。三字経⁽¹⁰⁾を女書で書くのを習って全部暗記した。練習しなければ覚えられないから自分で復習した。(93年8月、94年8月、95年9月、97年4月)

2.2.1.2 娘々廟を介して習う

龍眼塘⁽¹¹⁾の娘々廟へは毎年行った。17、8里⁽¹²⁾あった。高銀仙ら10数人と一緒にいった。2月の初一⁽¹³⁾が廟を開く初めの日。廟の近くに小さい店が

出ていた。野菜や果物を売っていた。廟では子どものいない人は子どもを願
い、お金のない人はお金を願った。女書を書いた紙が箱にいっぱい入って
いた。線香や紙銭⁽¹⁴⁾を買うと、女書を書いた紙をくれた。知っている歌が書い
てあるからわかる。女書を書いた紙を家に持って帰って練習して、次の年に
また持っていく。紙をもらうと、紙を返す。扇子をもらうと扇子を返す。返
すときは自分のことを書いて、自分の願いを持って行った。1年の間に練習
して上手に書けたものを返すことになっていた。(02年11月)

娘々廟というのは、この地域では花山廟と龍眼廟があり、どちらも唐代の徳のあつた女性を祭ったものである。その女性というのは、山でさまざまな薬草を摘んできて、村人の病気を治したとか、村人の悩みをきいて癒したとかで、村人のために尽くした人であった。その娘々に対する崇拝は今でも続いており、いつ訪ねても線香や衣類が供えられている。

子どものころ、この廟で娘たち5、6人が肩を組んで、紙を見ながらいい声で歌っていたのを聞いたことがあるという、男性に会ったことがある。60歳というその男性はその歌がとてもいい感じだったと記憶していた。

娘々廟が、娘たちの交流の場であり、その交流の中で女文字を習得し、伝承したセンターであったことを、陽煥宜の回想は裏付けている。

2.2.2 習おうとした動機

女の子たちが集まって書いたりして楽しそうにしているのを見て、書ける人が羨ましくて、自分も習った。あんなふうに自分も書きたいと思った。また、女書の歌をきくと、その響きがきれいだから、自分でも書いたり、歌ったりできたらいいと思った。母方の叔母もよくできたから、自分も書けるようになりたかった。

自分はただ習いたかっただけ。両親は習いたければ習っていいと言った⁽¹⁵⁾。習うのはとても楽しかったから、よく通った。やりがいのあったことだった。自分がかawaiiそうだから習った。千々万々の苦しみを味わったし、そうした

いっぱい経験したことを書いた。（94年8月、95年9月）

陽煥宜の娘時代は、そんなに辛い生活ではなく、結婚してからの方が大変だったのだが、遠い昔のことで、記憶が混ぜ合わさっているのであろう。「自分がかわいそうだから」習ったというのは、書けないのがかわいそうと思ったということであろう。

2.2.3 娘時代の文字の情况

娘のころ、高家村、上江墟に書ける人がいた。出身の楊家村には葛覃から嫁に来た人で書ける人がいた。200戸ほどの楊家村の中に12、3人娘がいて、2人だけ読み書きできた。自分と陽千千だった。隣の高家村には読める人が6、7人いたので、手紙のやり取りをした。

一般の村では女文字を書ける人は2、3人しかいなかった。書ける人の多い村でも最多で10人ぐらいだった。姉も書けなかった。近くにいた同年輩の娘は習わなかった。実の姉も習わなかった。彼女たちは遊ぶ方が好きだった。（93年8月）

2.2.4 何を書いたか

習得してからは紙に書いた。扇子は高くて買えなかったから扇子には書けなかった。16、7歳のころにはたくさん書いた。普通の歌も書いたが、三朝書も書いた。

この文字で書いたものは手紙、祈祷文、三朝書、自伝、漢詩を翻字したものなどで、書けない人に頼まれて書いてあげたこともある。三朝書を書いてあげるときは、頼みに来た人に、その人の家のことを尋ね、占いによって運が強いかわいかに判断して書いてあげた。三朝書をあげる相手をほめることばを書き、それも、人によって全部違うことばを考えた。頼まれて書くとき、普通の紙のときはお礼はもらわなかった。三朝書のときは100文とか300文とかもらった。書くことは楽しかった。（93年8月、94年8月、95年9月）

2.3 戦争・抗日歌

民国32年（1943年）旧暦2月、国民党の部隊が入り、村の人の不注意で隊長を撃った。軍隊は怒って村を略奪していった。そのときたくさん持っていた三朝書や刺繍を持っていかれた。

99年には、日本との戦争中、日本軍に抵抗・抗戦するために作られた抗日歌のことを知りたくて尋ねてみた。

女文字で書かれた作品の中に抗日歌と題するものがあるからである。

Q：戦争のことを覚えていますか？

A：あー覚えてる。日本の軍隊が来た。みんな皮のこんな（と言いながら膝を指して）長い靴をはいていた。豚を捕まえて殺した。息子は10何歳だった。

と言いながら突然抗日歌を歌いだした。調子よく歌っていて、はっと気づいて途中で止めた。「遠藤に叱られるから歌えない」と小さな声で言った。私が日本人であることを思い出したのだ。「いや、かまわないから歌ってほしい」と言うと、さらに続けて歌の半分ぐらいを歌ったが、「あとは忘れた」と言って止めた。

それにしても、戦争のことと言ったとたんに、この歌が口をついて出たのは衝撃であつた。それだけこの歌と戦争との結びつきの強さを示していた。

Q：この歌はだれが作ったのですか？

A：娘たちが集まってひとことひとこと作っていった。旦那さんが徴兵されて生きた寡婦になった人が作ったと聞いた。本にある義年華の歌とだいたい同じ。義年華・高銀仙が死ぬ前に趙麗明の本にあることを教えてくれて一緒に歌った。娘たちが歌っているのを聞いて、義年華が書いた。（01年3月）

「本」とは趙麗明の『中国女書集成』（清華大学出版社、以下『集成』）のことを

言っている。しかし、この本が出たのは1992年で、高銀仙も義年華もその前に没しているから、「本にあることを教えてくれる」ことはできなかったはずである。陽煥宜の思い違いであろう。

2.4 結婚

結婚したのは21歳のとき。その式の前後のこともよく覚えている。何人から三朝書をもらった。式の前日に1人が声に出して読み、読める人が後に合わせてよんだ。式の当日は、婚家で3人の「結交姉妹」が声に出してよんだ。男性は聞かず、婚家側の女性だけが聞いた。花嫁は歌わず、聞くだけ。歌の内容は、花嫁は女紅⁽¹⁶⁾がうまくできる、刺繍が上手だと、私をほめたものだった。

結婚式の日まで、相手を知らなかった。親が決めた相手だった。昔は親が決めたから、賛成も反対もない。行きたくもなかったが仕方がなかった。約束が決まったとき三茶六礼という、豚やお金などを男から女の家へ届ける風習があり、先方はそれをした。先方へは輿で嫁いだ。今の娘たちは輿には乗らずに、喜んでいくが、自分は泣きながら行った。親の傍を離れるのだから本当に悲しかった。嫁ぎ先の人はいずれも知らないから、少し怖かったし不安だった。でも、知らなくても怖くても行かなくてはならない。みんなそうだから、仕方がない。泣きながら行く先にいいことがあるはずがない。

夫とはほとんど口を利かなかった。笑われると恥ずかしいし、気持ちも通じないからあまり話さなかった。姑と舅はいい人だった。

土娘⁽¹⁷⁾が大安とかいい日を選んで迎えに来ると実家に帰れる。12月11日に結婚して、何日か後に土娘が迎えに来て、29日まで実家にいた。29日の小晦日を過ごし、婚家から誰かが迎えにきて、夫の家に行った。年越しは夫の家でしなければいけないと決まっていた。

新年2日にまた、実家に戻った。3月の田植えまで実家にいた⁽¹⁸⁾。3月に夫の家に戻ったあと、夫が毒蛇にかまれて死んだ。夫の死後、布団と衣服を持って実家に帰った。

23歳のとき河淵村の何家に再婚した。再婚の相手のことは互いに知っている同士だった。再婚の夫が、婚家にいくらか金を払った。

そこで8人の子供を産んだが、今は3人しか残っていない⁽¹⁹⁾。夫は賭け事が好きで借金も多く、1年に半年ぐらい食糧のないことがあった。娘を嫁がせるとき何組かの布団を持たせなければいけないのだが、その布団が買えずなくて、早朝、棉花畑へ行き、芋をかじりながら働いて、残っている綿花を集めたりした。

56年に長男が結婚した。61年に夫が死んだ。結婚後は忙しくなって、三朝書を読む暇もなくなり、女文字を書く暇もなかった。持っていた三朝書は文革のときだれかにとられた⁽²⁰⁾。(93年8月、95年9月、01年3月)

3. 90年以降の陽煥宜

3.1 現 状

苦労して2人の息子を育て、夫も亡くなった今は、銅山嶺の農場にいる息子の世話になりながら幸せな日々を過ごしている。暇があると女文字を書いている。書いていると楽しい。(93年8月)

このとき、陽煥宜は、いい声で歌ってくれた。自分の書いたものを見ながら、低い落ち着いた、しかものびのある声で歌ってくれた。生活が辛かったという内容のものだそうで、歌いながら涙をこぼしていた。写真とビデオを撮りたいと言うと、ちょっとと言って奥の部屋に入ってすぐ戻ってきた。紺色の木綿に刺繍のある前掛けのようなものをつけ、解かし直した髪に、中心に玉飾りの埋め込まれたヘアバンドをしてきた。一気に上品な気品のある女性になっていた。

94年8月、いつ生まれたかと聞くと「もうわからない」という答え。

1年前はビデオを向けようとしたら、部屋へ入って髪を整えて、お洒落をして出直してきたのに、今回はそのような気づかいもしない。病後でずいぶんふけていた。

元気なときは食事が終わったら遊ぶ。1人でトランプをして遊ぶ。同じような年の人はみないなくなった。1人で歌っている。他の人はもう歌えないか

ら。

暇なときは女文字を書いて楽しんでたが、病後で書けなくてつまらない。最近病気をして書けなくなっていらいらしている。(94年8月)

嫁は57歳、定年で家にいるから家の仕事は私にさせない。茶碗も洗わせてくれない。料理も作らせてくれないから、トランプをして遊んでいる。

豊かなのはいい。貧しいと食べるものもないし、着るものもない。以前は仕事をしないと食べられなかった。今は食べられる。(95年9月)

97年12月、下の息子が死んで、とてもがっかりした。何もする気がおきなくなった。(99年4月)

3.2 女文字

結婚後は書かなかった。書いてもしようがないから書かなかった。再開したのは趙麗明が調査に来るようになってから。

趙麗明が来るようになったのは、80歳ぐらいのときで⁽²¹⁾、結交姉妹の1人だった義年華が趙麗明に教えたから。義とは、娘時代に一緒に習ったことがある。趙麗明が調査に来てできるだけ思い出して書けと言われ、息子にも今は他に女書が書ける人はいないから書けと言われた。息子に言われたとき、そんな意味のないことをしたいと思わなかった。

気持ちのいいときは書く。書きながら昔のことを思い出す。結婚する前に結交姉妹がよく集まって、嬉しいことや悲しみを共にして歌ったりしたことを思い出す。(96年8月)

自分が死んだら困ると思って、病気になる前、たくさん、扇子に書いた。大きい扇子に書くのに2日ぐらいかかる。絹の布は3日かかった。

中学校の教師をしている、孫の嫁に、学校が休みの時教えている。歌を教えて書く。それを見て、孫嫁が書く。彼女は表を文字、裏は漢字の扇子を1本書いたことがある。彼女は覚えてもしようがないと言っている。(97年4月)

自伝を書くときは黙って書く。書いてから歌う。伝記には自分の昔の生活の苦しみを書いた。自分の苦しみの歌は書くだけで歌わない。他人にも聞かせない。家族にも聞かせない。自分でとっておいて、娘に渡すために書いた。

義年華も自伝を書いていたことはだれも知らなかった。

伝記を94年に書いて趙麗明に送った。『集成』より詳しく、その後のことも書いた。ノートに1冊書くとそのつど、北京の趙麗明に送っている。(96年3月)

息子の妻の話では、自分が嫁いで来て以後、書いているのをみたことはなかったという。次男の話では歌はよく歌っていたそうだ。また、陽煥宜自身によると、長男は、歌は悲しい響きだから歌わない方がいいと、言っていたという。息子たちも、母親が歌う歌はよく聞いていたが、文字を書くのは見ていなかったようだ。

趙麗明は、陽煥宜に書くことを勧め、励ましつづけてきた。1992年刊行の『集成』にも、陽煥宜の多くの作品を収めているし、2004年4月には『百歳女書老人 陽煥宜女書作品集』（国際文化出版公司）を編集して、出版した。

趙麗明が扇子を送って来たので10数本書いた。死んだらこわいから、今のうちに少しでも残しておきたい。書いた歌は、娘のころ好きだった歌だ。今では自分の歌は作らない。昔は書いてみんなにあげた。自分の一生は悲しい一生だ。哭嫁歌⁽²²⁾は昔は書いたけど、解放後はそういう悲しい歌はだめだったから、書かなかった。ノートにきのう書いたのは結交姉妹の歌で自分で作った。この歌が一番好きだった。結交姉妹の4人も同じように好きだった。女書を知っていると、悩んでいる人を慰めることができてよかった。(97年4月)

小学生が学校で使う小さなノート、大きな扇子、ハンカチなどを見せてくれた。自分が最後の伝承者であるという自覚と使命感から、病気の後にはたくさん書いたようであった。「きのう書いた」というのは、その前日訪ねたとき書いたことを言っている。

3.3 北京へ行く

1995年8、9月北京で開かれた世界女性会議、NGOフォーラムで、わたしたちは中国女文字、日本平仮名、韓国ハングルのアジアの3文字と女性文化についてワークショップを計画した。その会に陽煥宜にも出てもらいたいと江永県政府に頼んだ。高齢であり、何かことが起こって貴重な存在を失うことになったら困ると、家族や地元政府は難色を示した。しかし、彼女はどうしても北京に行きたいとがんばった。家族・親戚の前で「途中で万一のことがあっても、そのときはそこで灰にして家へ持って帰ってくればいい」とはっきり言い、それを全員が聞いて家族も納得した上で北京へ連れてきた、と江永県の副県長はそのいきさつを語った。

北京へ来ることはできたが、残念なことに、世界女性会議の会場には入れなかった。趙麗明がIDカードなどの手続きをしていなかったからである。せっかく北京に呼ぶのだからともう一つ準備していた清華大学でのシンポジウムには参加して、大勢の研究者、マスコミ、学生の前で文字を書き、歌ってくれた。昔の女性たちの歌った歌を伸びやかな声で歌い、短い詩を書いてくれた。短時間ではあったが、初めて女文字を目にする北京の学者や若い研究者に深い感動を与えた。

陽煥宜が家に戻ったところを見計らって、遠藤も、江永県へ赴き、女文字の情報を求めて、村々を調査した。陽煥宜は、北京の感想を次のように語った。

清華大学では知らない人ばかりで、感想は言えない。だれが学者か先生か教えてくれなかった。北京はすごい町だった。大きくて何でもあった。いっぱい食べ物があつた。毛沢東記念館で毛沢東を見た。毛沢東は皇帝様だった。

今回北京に行くために靴を作った。みなさんにあげるためにハンカチを書いたが、2か月かかって準備した。北京で紹介するために持って行った三朝書は、表紙は自分で作ったが、中の文字は自分が書いたものではない。家に100年ぐらい古い三朝書があり、それを写した。三朝書は、結婚前はだれでも作るし、たくさん作ったから作り方はよく知っている。ハンカチの中央の図案は、全部違うものをひとつひとつ書いた。型紙をあてて書いたのではない。

文字は去年もらったサインペンで書いた。図案はボールペンで描いた。1枚の文字と図案を書くのに2日はかかる。(95年9月)

去年是北京へ呼んでくれて、とても感謝している。遠藤といっしょに日本へも行きたかった。(96年3月)

3.4 健康と身体のこと

最初訪ねたときは、小柄ながらも血色がよく、とても丈夫そうだったが、その後行くたびに、いつ病気した、大病した、怪我をした、という話を聞いていた。

86年の6月に大病をした。78歳だった。1週間何も食べられなかった。7月に趙麗明が来たときはあまり書けなかった。

趙麗明が最初に来たときのことを思い出して話していた。86年で78歳というと、1908年か1909年生まれということになる。しかし、趙麗明が陽煥宜を初めて訪ねたのは、1990年のことだから、病気のことと記憶がごっちゃになっているようだ。

96年9月に訪ねたときは、「6月に病気をして1週間入院した」と話していた。

97年4月末に訪問したときは、病後ですぐ疲れると言って、歌も歌えず書くこともできなかった。

この年(97年)の正月23日、風邪から熱が出て意識がなくなった。夜中の3時に薬を飲んで、朝医者に来てもらって点滴した。2月4日ごろ起きられるようになった。今でも心臓が苦しく、ドキドキする。呼吸困難になることも、眠れないこともある。

現在食欲もあまりなく、粥や豆腐のようなものだけ食べている。毎日寝たり起きたりで何もしていない。病気の後書いていない。視力が弱くなり、目を使うと涙が出てくるから書けない。(97年4月)

台湾から2人来て、書いたものをいっぱい持って行ったけど、最近来なくなって淋しい。半年も住んでいた人がいたけど、その人も来なくなった。

この冬は足が痛かった。趙麗明は自分が足が痛いと聞いて飛んできた。情の深い人だ。曇りと雨の日は膝が痛い。

北京へ行ったことはちゃんと覚えている。楽しかった。（99年4月）

訪ねる人が少なくなって淋しい、というのは、女文字に興味を持ってくる外部の人が一時期より減ったということだろう。

2001年3月に訪ねたときは、庭先を歩いていて、すっかり元気になっていた。

今は元気になった。何もすることがない。毎日お粥を食べている。病気はないが年をとった。家の周りをゆっくり歩いている。関節が痛い。寝る時も痛いことがある。（01年3月）

2002年5月には、5月21日付けインターネット<http://www.sina.com.cn>上に、陽煥宜が転んで怪我をして、「世界唯一の女書の伝承が危機に迫っている！」との記事が載った。心配になって、江永県の知り合いの家に電話して様子をきいてもらったが、幸い、怪我だけで命に別状はないということだった。

同年11月、江永県で、女文字の国際シンポジウムが開かれたのでそれに参加して、陽煥宜の家も訪ねた。そこで、5月の怪我のことを聞いた。

あの怪我は食事のとき、ソファから立って食事机のおかずを取ろうとして、転んだ怪我だった。痛みは数か月続いたが、民間草薬で治した。今はお粥だけ毎日3回食べている。息苦しいときがある。

女書は気が向くと書くが、書いても意味がないから書かない。もう役に立たない。甫尾が盛んになってこっちは道も悪いし、人も来なくなった。向こうが良くなって、人気が出てきた。文化村の開村式の招待状も来たが行かな

かった。そこに展示する物を出してほしいと言ってきたが出さなかった。その後県から人が来て、貸してほしいと言うので7つ貸した。数か月前に孫嫁に頼まれて書いた物があったので、それを貸した。

女書は役に立たないから、書く意味がないと、醒めた突き放した言い方になっている。また、県の依頼の資料提出にも最初は応じなかったらしい。2002年10月に甫尾村（最近県政府は普美村と書くようになっている）に女書文化村が出来た。そのためこちらに人気が出て、今までの自分の所へ来ていた訪問客がとられてしまうと危惧し、自分への関心が薄れると思って、いらだっているようだった。文化村ができることで、道が悪くて大きい車の入れない自分の村への客の足が遠のくことを見越すなど、村から出ることはなくなった高齢に達した後でも、県の動きを鋭く見ていた。

確かに文化村も開村当時は人出で賑わっていたが、その1年10か月後にはすっかりさびれて、県の目当ての観光客はだれもいなかった。

4. 最後の訪問

2004年9月7日午前、いつもの銅山嶺農場に、日本の中国女文字研究会のメンバー、英国人ジャーナリスト、アメリカ人写真家など18人で訪ねた。

この訪問を計画するときに大きな危惧を抱いていた。半年前の04年3月、我々の研究会の1員が陽煥宜を訪ねたときは、彼女はとても衰弱していて話もほとんどできなかった。文字も書けず、歌も歌えなかった。だから、今回訪問しても会えないかも知れないという、大きな不安材料を抱えたままの計画であった。

家を訪ねると床に臥していたのを、来客というので起きてきて対応してくれた。02年秋訪問の時よりも、さらに小さくなったように見えたが、顔を見るなり嬉しそうに手を延べてきた。薄暗い狭い部屋から明るい室外に出て1時間ばかり、書いたり、歌ったり、インタビューに答えたりしてくれた。

初めはただ顔を見せてもらうだけでいいと考えていたのが、外に出てもら

い、日常のことを聞いているうちにこちらは欲が出て、つい、今でも字が書けますか、などと尋ねてしまった。すると、うん、書けるよ、との嬉しい返事。あわてて紙とボールペンを出して、何でもいいから書いてくださいと頼む。

何を書けばいいかと、通訳の女性に聞いていたが、まず私の名前を書いてくれた。今回は1年10か月ぶりなのだが、ちゃんと覚えてくれていて、いつもの字を書いてくれた。次に、P24の最後に掲げた「陽煥宜の文字」⑧のような文字を書いてくれた。それを漢字に翻字すると次のようになる。

「遠里老師齊到来没歓待

陽煥宜

二〇〇四年九月七日」

まだしっかりした筆の持ち方で、震えも見せず書いてくれた。少し形は乱れているが、「遠くから来てくれたのに、もてなしできなくてすまない」との気配りを、即座に考えて書いたものである。

つつい、また、歌も歌えますかと聞いたら、いいよ、ということで、この地方の女性が好きでよく歌うという「1は天上の娥眉の月、2は2頭の獅子が飾った球を奪い合う、3は3人の豪傑が兄弟になる……」の数え歌を歌ってくれた。

声に最初1993年に会ったときほどの張りはなく、声量も衰えていたが、味わいの深い節回しは従来どおりのものであった。女文字は書いていますかという問いに、今でも頼まれれば書くと言えた。

今回初めて訪ねたイギリス人ジャーナリストが、だれに習ったかと聞くと、義早々に習った、と、これも従来私たちに答えたと同じ伝承の経路を伝えていた。結交姉妹は3人いた、三朝書も頼まれて何冊も書いた、と答えるなど、毎回の質問の答えと矛盾のないものであった。

頭脳が明晰なことは、毎回訪れるたびに、感歎してきたのだが、今回も質問に対する答えの的確さ、要領のよさに、その衰えは見出せなかった。

最初抱いていた危惧は完全に払拭されて、これなら、まだまだ大丈夫、最

後の伝承者はまだ当分は健在だ、と勝手に思いこんだ。そのことが、希望を交えた確信となり、安心となって「また来るから元気でいてください」と手を握って家を辞したのであった。

ところが、9月25日、北京からの連絡と、Japan Timesの記事で、陽煥宜が9月20日に亡くなったことを知った。わずか2週間前に、あれほど、気持ちよさそうに歌ってくれた歌がまだ耳に新しくて、彼岸に去ってしまったとはどうしても信じられなかった。何度も死にそうな病気をしながら奇跡的に元気を取り戻していた不死鳥のような彼女だから、まだまだ奇跡を起こしてくれるのではないかと思いたかった。

会った日から、2週間、彼女の身体に何が起こったのか。現地から伝わるわずかな情報では、彼女は亡くなる前日も、訪問者に請われて歌を歌っていたという。会うたびに小さくなっていた体つきからも、大した病気もせず、枯れ木が朽ちるように静かに息を引き取ったのではないか。家人にも気づかれないうちに、苦しみもなくひっそりと眠ったまま世を去った、そう信じたい。

彼女が世を去ったことで、女文字を本来の姿で伝承するのがますます困難になり、いよいよこの文字の最終局面を迎えたという思いが強い。

最後に、陽煥宜が折にふれて書いてくれた遠藤宛の短い文章のコピーと、それぞれの漢字訳とを、年の順に示すことにする。

① (93年 8月)

② (94年 8月)

紅紙寫書送我訴一篇
寒苦你不訴苦章你不提

銅山 農

陽煥宜

遠藤織×枝

遠藤織×枝

*

* 間違えて書き直したもの

遠藤老師

遠藤老師

陽煥宜

陽煥宜

一九九三年

一九九三年

八月二十七日

八月二十七日

③ (95年 9 月)

日本の朋友
文教大学先生
江永県銅山嶺農場

④ (97年 7 月)

陽煥宜写的
九七年
九月十四
天長地久
榮華富貴

⑤ (99年 4 月)

遠藤老師
好多尽孝心
幾位先生
到来好礼情
一九九九年
四月二十六
陽煥宜
九十一歲

⑥ (01年 3 月)

遠藤老師你
来到我家没招待
幾位先生請諒解
二〇〇一年〇一年
三月初三
陽煥宜写的

⑧ (04年 9月)

遠里老師齊到來沒歡待

陽煥宜

二〇〇四年九月
七日

⑦ (02年11月)

遠藤老師有心看我好熱情

一打天上鵝眉月
二打獅子搶綉球
三打天上三結義

陽煥宜

注

- (1) 現在清華大学中文系教授。1986年からこの文字の調査研究に加わり、中国での第一人者とされる。
- (2) 娘が結婚して3日目に、実家から婚家へ贈り物をする際に娘への贈り物として届けられる冊子。姉妹・母親・叔母・結交姉妹（注3参照）などが、嫁ぐ娘との別れを悲しむ歌が書かれている。
- (3) 血縁はないが仲のいい少女たちが、義理の姉妹の関係を結ぶこと。2、3人で結ぶ場合も7、8人で結ぶ場合もある。
- (4) 結交姉妹の契りを結ぶときに相手に誘いかけたり、その誘いに応じて、受諾する意思を表したりする文書。
- (5) 96年3月に尋ねたときは、15、6歳のときと答えていた。
- (6) あとでは、陽の出身と同じ楊家村と言っている。「陽三三」というときもある。
- (7) 1里は500メートル。
- (8) 94年9月20日放映のNHKテレビ「謎の女文字を追う」（94年現地収録）では10歳から習い始めて10年ぐらい習ったと答えていた。また、『中国女書集成』には14歳から始めて3年ぐらい習ったと記されている。
- (9) 纏足をしていたということ。
- (10) 3字を1句として綴った子ども用の教訓書。
- (11) 道県龍眼洞村
- (12) 97年9月に聞いたときは3里と答えていた。
- (13) 月の第一日
- (14) 紙で貨幣の形に造ったもの。死者などを祭るときにこれを焼く。
- (15) 『中国女書集成』には、医者だった父が、はしかが流行って、その患者たちをみているとき、そこに集まって女書の話をしている女性たちが教養ある人たちだったので、娘の陽煥宜に習わせたと書かれている。
- (16) 糸つむぎ、機織り、縫物、刺繍、布鞋作りなど、従来女性の仕事とされたものの総称。
- (17) 親戚の中の、子供がいて、運が強そうな、いい人がその役の人になる。
- (18) この地方では嫁いだ娘は、「不落夫家」といって、結婚後こどもができるまでは、節句など決まった日を除いては実家に戻っているという風習があった。

- (19) 93年訪問時は、息子2人娘1人が存命だったが、99年訪問時に二男を亡くしており、01年訪問時には長男も亡くしていた。
- (20) 11ページでは戦争のとき国民党の軍隊がもっていったと言っている。
- (21) ここで、陽が折々に答えてきた彼女の年齢について、整理しておく。趙麗明が初めて陽を訪ねたのは1990年で、そのとき「80歳ぐらい」だったという。93年に遠藤が尋ねた際は84歳と答えていた。翌年は「わからない」と言い、99年に書いてくれた色紙には「1999年 91歳」と記している。2004年に尋ねたときは「98歳か99歳」と答えて、ここで一挙に2、3歳増えている。晩年、記憶があいまいになったせいであろうか。
- (22) 結婚式の3日前から、娘たちが嫁ぐ娘の家に集まり、歌をうたって別れを悲しんだ。そのとき歌われた、嫁ぐのを悲しむ歌。

参考文献

- 遠藤織枝 (1993) 「中国女文字紹介」『ことば』14号現代日本語研究会 8-13
- (1994a) 「94夏 湖南省女文字現地調査報告」『文学部紀要』9-1文教大学文学部 10-31
- (1994b) 「中国の『女文字』発掘 なせ、女性だけの文字が必要だったのか—『総合ジャーナリズム研究』1994年春号48—53
- (1994c) 「中国女文字調査報告」『ことば』15号現代日本語研究会19—27
- (1995) 「95年中国女文字調査報告」『ことば』16号同上128-136
- (1996a) 『中国の女文字—伝承する中国女性』三一書房
- (1996b) 「96年中国女文字調査報告」『ことば』17号現代日本語研究会139-143
- (1997) 「96夏、97春中国女文字調査報告」『文学部紀要』11-1文教大学文学部 28-156
- (1998) 「98中国女文字研究報告」『ことば』19号現代日本語研究会92-105
- (1999) 「99中国女文字調査報告」『ことば』20号 同上236—241
- (2000) 「99中国女文字調査研究報告」『文学部紀要』文教大学文学部13—2 147-164
- (2001) 「01中国女文字調査報告」『同上』同上15-1 84-103
- (2002) 『中国女文字研究』明治書院

趙 麗明（1992）『中国女書集成』清華大学出版社

（2004）『百歳女書老人 陽煥宜女書作品集』国際文化出版公司

（付記：文中の敬称はすべて省略している。

：この調査は平成16年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(1)によっている。)

（えんどう おりえ）